

特集「芸術と色彩」 Special Issue: Art and Color

色彩の爆発—イタリア未来派の表現

An Explosion of Color: The Expression of Italian Futurism

日高 杏子
Kyoko Hidaka

芝浦工業大学デザイン工学部
College of Engineering and Design, Shibaura Institute of Technology

キーワード：未来派, 電灯, 色彩宣言, ナショナリズム, 統合芸術
Keywords：Futurism, Electric lamps, Manifesto del colore, Nationalism, Gesamtkunstwerk

1. はじめに

本稿では、イタリア未来派の芸術家・デザイナーたちの配色表現の背景について色彩論の視点から解説する。未来派運動の中核であった画家・彫刻家バッラ (Giacomo Balla, 1871-1958) の宣言と作品などを中心にひもといていく。20世紀初めごろのイタリアにおいて、触覚、味覚、嗅覚、音、動き、速度の感覚を大胆な配色づかいと抽象表現へ向かわせたきっかけはなんだったのだろうか。まず第1にテクノロジーの発達、とりわけ電灯、第2に色彩論の影響、そして第3に配色調和の独特な革新によるナショナリズムが背景にあったのではないかと仮説を立てる。

未来派運動は、1909年2月20日「未来派宣言」の『フィガロ』紙上発表から始まった。「宣言」(マニフェスト)は、1848年のマルクスとエンゲルスによる共産党宣言に習い、革命のビジョンを表明することである。未来派の指導者マリネッティ (Filippo Tommaso Marinetti, 1876-1944) は、スピード、パワー、動きを備えた文明の利器と美を称揚した。未来派の目指す到達点は、過去の芸術と伝統を否定し、文化の革新性と独創性を謳歌する新時代の到来であった。造形、演劇、広告、写真、音楽、さらに食さえも通じ、未来派は人間の五感を刺激しようとした。

2. テクノロジーと感覚の変化

20世紀初頭は、さまざまな発明や巨大な戦争にとともに、自動車、飛行機、電話、工場などの技術進歩と環境変化が目覚ましい時代であった。これらの進歩と変化が、人々の感覚に著しい刺激を与えた。

電灯は、画家の新たな主題となった。昼夜問わず屋外・室内を明るく照らす人工照明の進歩は、人々の色彩に対する感覚を揺るがしたことはいうまでもない。マリネッティは「未来派宣言」で、文書「月光を殺せ!」を記した。科学・テクノロジーによって自然を支配す

ることを呼びかけたのである。このマリネッティへの応答として、バッラは、電灯が自然の三日月の明るさを超えた絵画『街灯』(図1)で象徴的に描いた。

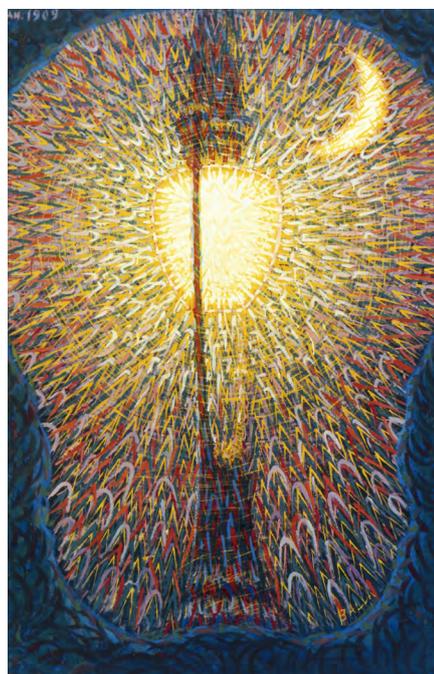


図1 バッラ『街灯』1909
油彩, 174.7x114.7cm
ニューヨーク近代美術館所蔵
写真提供 GRANGER/ユニフォトプレス

3. 色彩論

18世紀以降のヨーロッパとアメリカでは、表色系の考案と色彩の理論化が盛んになった。バッラは各種光源で変わる「色彩の光学」に興味を覚え、光学と表色系を意識した『虹の相互浸透』の連作を描いた。バッラ『虹の三つの小品』(1912)は、幾何学形パターンに並んだ色彩の作品で、抽象絵画の先駆とされている¹⁾(図2)。この作品は、ドイツの科学者ランベルト (Johann Heinrich Lambert, 1728-1777) が18世紀末に作成したピラミッド型表色系からアイデアを得

た²⁾。ランベルトは、染織の色の決定のために表色系を開発したといわれている。



図2 バッラ『虹の3つの小品』1912
水彩、紙
ふくやま美術館所蔵

バッラはさらなる色彩の研究をもとに、1918年10月4日から31日にローマのブラガーリア芸術の家での展覧会で、『色彩宣言』(図3)を発表した³⁾。



図3 バッラ『色彩宣言』1918

色彩宣言

1. 写真や映画が存在する以上、絵画による事実の再現は、もはや誰の興味もひかないし、興味をひくこともあり得ない。

2. 常にアヴァンギャルドであろうとするさまざまな傾向の美術家たちの中であって未来派はもちろん、未来派に半ば心を寄せる者にあっても、色彩こそが中心を占めるべきである。色彩が支配すべきだ、というのは、色彩こそがイタリアの才能の典型的かつ独占的な特徴だからである。

3. あらゆる北方絵画に見られる、色彩の不毛性およびその文化特有の重々しさは、美術を、灰色の世界、死の世界、静止界、修道女の世界、硬質な世界、悲観主義者の世界、中性的世界ないし、女々しく優雅だが決

断に欠ける世界へと永遠に引きずりこんでしまった。

4. イタリア未来派の絵画は色彩の爆発であり続けるものだし、またそうに違いない。したがってそれは、実に陽気で大胆で豊かな雰囲気を持ち、電気洗濯機のようにダイナミックで激しく、干渉主義的な絵画でしかあり得ない。

5. 伝統主義者および擬未来派たちの絵画はどれも、倒錯的なもの、古臭いもの、くたびれ果てたもの、陳腐なもの、と感じさせる。

6. 未来派の絵画は、弾ける絵画、人を驚かせる絵画である。

7. それはまた、さまざまな力が同時に働く、ダイナミックな絵画である。

G. バッラ 未来派⁴⁾

イタリアの民族性の表現として、色彩を中心に押し出す造形を強調したイタリア未来派は「色彩宣言⁵⁾」「色彩の演劇⁶⁾」の題名に見られるように、色彩と光をイタリア統一の特徴、五感をつなぐ仲介役として、位置づけた⁷⁾。

「色彩の爆発」という言いまわしをバッラは記し、陽気で大胆、豊かな雰囲気は、イタリア人の気質を率直に示した。「弾ける」、「驚かせる絵画」のように、見る人の情動を動かし、干渉する意図が明らかである。動きの激しさを「電気洗濯機のようにダイナミックで激しく」と喩えたユーモアは、微笑ましくさえ感じる。

北方ヨーロッパの低彩度な配色のアンチテーゼとして、鮮やかな配色を使った。バッラを始めとする未来派リーダーたちは、未来派絵画技術宣言で「本質的補色主義」を主張した。補色は色相環で180度反対側にある色で、補色同士ではコントラストの強い配色が生まれやすい。

1. 本質的補色主義は絵画において絶対的に必要なものである。詩における自由詩句のように、そして音楽における多声法のように。⁸⁾

自由詩句のように、韻などの規則から解放された自由さ、さらに並行して響く多声法に配色を喩えた。補色の多用は、伝統的な色彩調和と逆行する考え方である。さらに夜の室内電灯に照らされた人間の皮膚の色を次のように形容した。

「われわれの皮膚の下には暗褐色が這っているので

はなく、黄色が輝き、赤色が燃え上がり、緑色と青色と紫色が踊り、それらは官能的で愛撫するようだということ。

我々は紛れもなく夜行生活による二重生活を送っているというのに、どうしてまだに人間の顔にバラ色を見ることができのだろうか。人間の顔は黄色であり、赤色であり、緑色であり、紫色である。宝石店のガラス越しに見る女性の青白さはどんな魅力的な宝石が放つプリズムより虹色である⁹⁾

夜間の人工照明による色の見えの違いは、それまでの色のとらえ方と表現を変えたのである。近代前半の写實的、靜的であったアカデミック西洋絵画とは異なり、幾何学、運動などを表現し、電灯に彩られた人々の顔を刺激的な配色で描いた。このようにイタリア未来派の極端にカラフルな作品が生まれていった。

4. 感覚の刺激

4. 1 味覚と色

色彩と味覚は密接につながっている。焼き色で食べ物に火が通ったか、果実の色で熟しているかを判断するように、色が調理、品種、熟・未熟の判断基準になることが多い。

未来派の食の実験を紹介しよう。イタリア未来派たちは、マルチモーダルな味覚体験を広めた創始者でもあった¹⁰⁾。1871年の国土統一から歴史がまだ浅い時期、新しい統一イタリアのライフスタイル提案を未来派の芸術家は試みた¹¹⁾。

奇抜な手段で、五感を同時に刺激する食事を実際のレストランで提案した。食品を引き立てる食器や調度、食品彫刻を置く、音楽をかける、香りの演出をする、感触を楽しむために手づかみで食べる、といった次第である。20世紀前半に急速に発達した人工着色料を使い、食品にありえない色をつけた。イタリア未来派の教育者・デザイナーのムナーリは、著書『ファンタジア』でさまざまなデザインにおける奇想として、「色彩の交換」というアイデア例で青いパンを提案した¹²⁾。

イタリアの伝統の破壊を目的に、新たなライフスタイル提案として、味覚は当然として、色彩・形・質感も優先した。栄養摂取や満腹感以上に、視覚、触覚、聴覚、嗅覚の官能的な食体験を重視した¹³⁾。

4. 2 嗅覚と色

「未来派宣言」に「音、騒音、そして匂いの絵画」とい

う部分が含まれている。未来派・形而上画家のカッラ (Carlo Carrà, 1881-1966) が、1913年8月11日に書いた主張である。この主張は、19世紀までの絵画は靜的であったが、未来派の絵画は音、ノイズ (雑音)、そして嗅覚を反映し、五感を刺激するべきだと主張し、穏やかな印象派絵画やフランス的色彩調和を否定した。

「2 フランス人に典型的なコンセプトであり欠点である色彩の調和という概念のせいで、彼らはどうしても、ワットーの絵のような優美さを求め、したがって淡青色や緑、紫やピンク色などを濫用してしまう」¹⁴⁾

カッラは、イタリアの民族性や未来派運動を表現するために、刺激的な配色を勧めた上、音、騒音、匂いを次のように色彩と結びつけた。

「色彩という視点から言うと、音、騒音、匂いには、黄色、赤、緑、濃青色、空色、そして紫色などの色がある」¹⁵⁾

五感を刺激する芸術は、絵画、彫刻、デザインだけでなく、より総合体験へと向かっていった。

5. 総合芸術 (Gesamtkunstwerk) : 演劇と建築

総合芸術は、ゲーテを筆頭としたドイツのロマン主義者たちが唱えた美学の概念である。五感に訴える表現で、20世紀の建築、絵画、ダンス、デザイン、音楽、衣裳、演劇、詩、文学など、鑑賞者の感覚と心を多角的にゆさぶる芸術が確立した。

「演劇」は統合芸術の典型といえる。特に電気の普及にともない、各種の照明を使う舞台演出は、イタリアオペラやバレエの伝統と相まって進化していく。新しい電気製品や照明、音響機器を使って五感を刺激する表現は、演劇にも影響を及ぼした。『色彩の演劇：戦後の美学』(1919)というリッチャルディの論考がある。色彩や照明、そして音響を使用した劇場演出に関する第一次世界大戦直後時期の解説論文である。「色彩は登場人物の精神を視覚化し、劇のパトスを外在化することで、台詞や仕草の表面には表れない内的世界の生成を表現することを可能にする」と菊池は書いた¹⁶⁾。

建築のインテリアデザインも統合芸術といえる。2021年、ローマのバッラの住処が公開されることになった。ローマのバッラの家の内装、家具、衣服は鮮やかな配色の洪水で埋め尽くされ、中に入った者たち

に圧倒的な色彩体験をもたらす¹⁷⁾。このバッラの家を「溢れんばかりの色彩イメージは、創造性の抑制なき暴走」と鯖江は評した¹⁸⁾。

6. おわりに

イタリア未来派は、色彩と共に音、感触、味、香りを互いに融合させ、脳へ、そして情動を共鳴させる総合芸術・政治運動といえよう。

電灯を筆頭にテクノロジーを用い、五感をあらゆる角度から刺激するイタリアの色彩、照明、音響、食文化、演劇、映像、デザインは、新たなイタリア文化を創造する企てであった。多感覚の演出は、先進国の一員としての主張、愛国心や民族主義を煽るためにも使われた。新しいイタリアの他国との差別化をねらい、15～19世紀の西洋社会（特にフランスや北欧）が重視してきた色彩調和の破壊をあえて目指した。補色を用いた不調和に映る配色をわざと使い、スピード感や騒音などの刺激で人を驚かせ、不安にさせ、魂を揺さぶった。

イタリア未来派は、機械化、破壊や戦争賛美などをキーワードに暴力や対立を美化し、美術館や図書館などの文化施設の破壊さえも訴えていた¹⁹⁾。イタリア未来派は、ファシスト政権を支えた団体であり、意図的に人を不安に陥れ、根本思想として戦争の肯定と賛美があるため、倫理的に批判を受けやすい。

だが、テクノロジーで新しいイタリアの民族芸術を創造したのがイタリア未来派でもあった。それまでのヨーロッパ社会が重視した伝統、静けさ、調和などのアンチテーゼとして、爆発的な配色を使った。バッラの動きの表現についての論考で、谷藤は「生の躍動は爆発的」と記した²⁰⁾。このように新しいイタリアの生命、躍動感を示す瞬間、まさに色彩の爆発が起こったのである。

参考文献・注釈

- 1) エンリコ・クリスポルティ。バッラ『色彩：ジャコモ・バッラ展カタログ』見玉画廊, 1990, p.39.
- 2) 谷藤史彦「ジャコモ・バッラの「動き」の造形について」『ふくやま美術館研究紀要』創刊号, 2001, p.55.
- 3) 谷藤史彦『ルチオ・フォンタナとイタリア20世紀美術：伝統性と革新性をめぐって』中央公論出版, 2016, pp.157-163.
- 4) 『色彩宣言』エンリコ・クリスポルティ。1992, pp.142-143.
- 5) Manifesto del colore. 1918年10月.
- 6) Il teatro del colore di Achille Ricciardi. 1919.
- 7) Classen, C. “5. Symbolist harmonies, Futurist colors, Surrealist recipes Crossing sensory borders in the arts, ”The Colour of Angels, 1998, p.127/209 (Kindle).
- 8) 井関正昭「未来派絵画技術宣言」『未来派 1909-1944』東京新聞, 1992, p.117.
- 9) 井関正昭「未来派絵画技術宣言」『未来派 1909-1944』東京新聞, 1992, p.116.
- 10) スペンス, C. 『「おいしさ」の錯覚:最新科学でわかった, 味の真実』角川書店, 2018, pp.344-355.
- 11) 田之倉稔『世界史リブレット78 ファシズムと文化』山川出版社, 2004, pp.86-87.
- 12) ムナーリ, B. 『ファンタジア』萱野 訳, みすず書房, 2006, pp.68-69.
- 13) スペンス, C. 『「おいしさ」の錯覚:最新科学でわかった, 味の真実』角川書店, 2018, pp.344-355.
- 14) 多木浩二『未来派：百年後を羨望した芸術家たち』コトニ社, 2021, p.311.
- 15) 多木浩二『未来派：百年後を羨望した芸術家たち』コトニ社, 2021, p.315.
- 16) 菊池正和「リッチャルディの「色彩の演劇」と未来派演劇におけるその影響について」『言語文化研究』vol.43, 2017, p.48.
- 17) Vogueのウェブ記事。Casa Balla: eccezionale apertura al pubblico
https://www.vogue.it/news/gallery/casa-balla-museo-aperto-maxxi-mostre-roma#intcid=_vogue-it-bottom-recirc_b875eb12-ba9c-4234-8971-6dcd88d15c8e_entity-topic-similarity-v2
(参照: 2022-08-08)
- 18) 鯖江秀樹「序 ジャコモ・バッラの「家」」『糸玉の近代 20世紀の造形史』水声社, 2022, p.152.
- 19) Saint-Point, Valentine de, Manifesto of the Futurist Woman. An Answer to F. T. Marinetti. Milan, Italy: Governing Group of the Futurist Movement, 1912-03-25.
- 20) 谷藤史彦「ジャコモ・バッラの「動き」の造形について」『ふくやま美術館研究紀要』創刊号, 2001, p.60.